

「新しい環境に溶け込み、自分の力を発揮できる」

人と違う経験を積みたいと協力隊に応募し、モロッコ中部の漁村スィラケディマに派遣されました。配属先は、漁業免許の登録・更新の手続きや水揚げ量の集計などを担当する漁業組合で、職員は3人だけ。書類が床や机に平積みされ、1枚の書類を探すのに全てひっくり返すという効率の悪さでした。そこで、バインダーなどを使った書類の分類やパソコンでのデータ管理を導入しようと考えました。しかし、保守的な彼らに新しい方法を押しつけても受け入れてもらえないため、毎日たわいもない会話も含めて積極的にコミュニケーションをとろう

と心がけました。そうすると次第に信頼関係が生まれ、話を聞いてもらえるようになりました。

この経験は、まさに今、日本で生きています。現在の仕事は、東日本大震災の被害を受けた宮城県女川町での復興支援。復興庁とJICAなどが連携し、協力隊経験者を被災地に派遣する制度があると知り、まさにこれがやりたいことだと参加を決めました。大学時代に専攻していた都市計画の知識を生かして鉄道の復旧を担当していますが、町とJRにはそれぞれの復興計画があります。工期や資材置き場の確保など、多くの関係者が関

わる中でスケジュールを調整しなければなりません。新しい仕事を、知らない土地で、初めて会った人と一緒に進める。実はこれ、協力隊の活動と同じ。「違う土地から来て、ここまでできるやつはなかなかいない」と地元の人に言ってもらえた時はうれしかったです。少しずつ復興が進んでいることにやりがいを感じています。

復興庁
女川町役場
中谷 将さん
NAKAYA Masaru

パソコンを使って効率的にデータ管理ができるようになった同僚たち



座学に加え、積極的に実験も取り入れて物理の授業を行った

本社のショールームで海外向けの製品について説明する行本さん



「幅広い視野があるからこそ、良い関係を築ける」

白い理科の先生になりたい。大学時代にそう思い、海外経験を積もうと参加したのが協力隊でした。パプアニューギニア西部、キウंगाの高校に理数科教師として配属されたのですが、学校の数も先生も足りない。専攻する生徒があまりいない物理は、教科書も教材もほとんどありませんでした。ないなら、作るしかない。運動方程式や熱力学などの解説書を作ったり、ペットボトルでロケットを飛ばす実験を授業に取り入れたりと工夫しました。すると、次第に生徒たちが私の授業を楽しみに待っていてくれるようになったのです。

でも、一番変わったのは私自身かもしれません。協力隊に参加したことで、これからも世界と関わる仕事がしたいと人生を大きく方向転換。海外での売り上げが半分を占めるエアコンメーカー、株式会社富士通ゼネラルに就職し、中国や韓国と

協力隊の経験、 どう生きていますか？

JICAボランティアとして過ごした日々は十人十色。開発途上国で得た経験を糧に、今、どんな日々を過ごしているのか。それぞれの進路で活躍する3人に聞いてみよう。

株式会社富士通ゼネラル
調達企画部
行本 貴司さん
YUKUMOTO Takashi

いった海外の取引先からの部品調達を担当しています。協力隊に参加する前と比べると、日々世界で起こっていることを気にかけるようになった自分に気がきます。また、各地に散らばった同期の隊員との交流を通じて、日本ではあまり知られていない国の知識も増えました。取引先も世界の情勢やビジネスの動きに敏感ですから、常に情報を共有し合い、良い人間関係を築いていくことが大事。お互いがwin-winとなれるビジネスにつなげていきたいと思っています。

特集 JICAボランティア
私と世界をつなぐ道

世界銀行
社会開発部

大島 かおりさん
OSHIMA Kaori

「現場から世界の動きまで、 両方の視点を持てる」

文化人類学を学んでいた大学時代、研究のためにラオスを訪問。今の生活を変えたいと真に願う人々に出会い、現地のニーズに合った支援とは何かを考えるようになりました。開発途上国の現場をもっと知らなければと、青年海外協力隊員としてニジェールへ。校舎も先生も不足している地方の村で、住民たちに学校教育に関心を持ってもらうきっかけづくりをすることに。親に学校を身近に感じてもらうため、現地の先生たちと協力し、校庭で肥料やかまど作りのワークショップを開催しました。こうした活動を通じて学んだのは、開発に地域の人々を巻き込む大切さ。でもそれだけでは十分でなく、同時に政府に働きかけて、教育制度や政策を整えていく支援も必要だと感じました。

帰国後は途上国を政策面から支えたいと、世界銀行で働いています。今、担当しているのは、世界銀行の支援するプロジェクトが各地でどう進んでいるのか、情報収集や分析をすること。海外出張もありますが、ワシントンの事務所にいることが多く、現場からは距離があるのも事実です。

そこで役立つのが協力隊の経験。例えばストライキで授業が行われないと聞くと、ニジェールで出会った先生たちを思い出します。公立の学校では給料が低かったりひどい時には支払われず、先生側にも事情があるのです。こうした実態を踏まえ、「自分のこと」として途上国の課題を捉えられるのは現場にいたからこそ。これからも現場と政策、両方の知識と経験を蓄えて開発に携わっていきます。

隊員時代 in ニジェール

村の女性たちを集め、環境問題など地域が直面する課題を話し合う大島さん(右)



パプアニューギニアへ出張し、
地元の高校生に話を聞く

